三府戯場客者評判記

自笑序

三馬他

へ13
3430
2

3430
巻 2

花江戸三芝居 噂者評判記巻之下

江戸 式亭三馬戯作

上上吉 座員 員頭 偏頗

[次元] そたびくせかつり狂言ふ善悪あくとゝ
の是別つく。おれハ堀町見員。おれハ葺屋町見員。
おれハ木挽町ひいきといふそゝんでもかそもつぐ
見員とる芝居だろうと吸物。役者めくらも狂云
わろもかゐぶ。芝居者と見員の文所見員
よいもまぶよく情のこゝろをされくゝ。仏の芝居
ハふりひいてもうれなといふ堅ひいき むさ えのきハ
代く歌舞伎元芝居ハ堀町中村座と櫓ふ移ハ
ひとつくゆといふ所法快もめるさい いき コレ
ひしハ葺屋町見員ぐつぐ ひいき コリヤくとハ
本挽町ぢやけれど。畢九もけろ方で ひいき ヲサ。

ひとりもふたり町の芝居があるんと能と一の
富でもうつと毒ちゃ分りち（図）いきそれいとの
堀町は芝負もおんじこと。外の芝居ばかりなれたそ
あれい氣の毒ともいろね（図）ひいきあれとこと
とらもよそのは芝居ばかりまねるのいお氣のこと慌
のめくるぢや（乃ゑ）本西くそれが別産氣負と
中ばりのされどかくるも昌負は一流ちばね
繁昌昌れ基めでたいく。

上上士　身振好　格別
上上士　聲色好　格外

（乃ゑ）身振好。麦色好ける人は一ツ不出世ち
これは芝居執名の内ものも格別の拍子ぬ黒人
とよぶでるく氣は身振師。麦色連とうと別産ホ
立ちはまれが氣者氣。麦人氣ばりるも上評

判の外といと。代義浮ホハくりくませねぞ（乃ゑ）
ミテラス身振好浮ホ好と出ばこハいろ（乃ゑ）そと
が見りぢ今年。身振師麦色連ハ遠くぶ
ムルホよりてたとい麦人でもまく人風態これ氣
浮にうりませね。身振麦色好とい
字が目はつけ不實ホいくくり年。これは身振が
好ぢやとそ月待日ホいこうれど身振師も
めくぶ又声色好ぢやとそ人ホせがまれ居
氣ことらうれど。麦色連ホもやぶさまぶ
好の実概ホハ物人連山振の摩ぶ感く
は身ちらも人浮とちぶ。ては身ぶり特ま様。
あれは別氣浮ホのは年ま（又世）そん今ら年
生の人ぢやな（乃ゑ）さ年うで今年（は世）ちハ
又江戸は身振師や麦色連中は名と出て。
獨くの浮ホとちそよやどなりみくあり

[ふり仮名]そんなら二町まちや、生れの違ふ者たいとりちも生れぬ。[乃至]それは違中
とヤスりのゆゑ浮くるりませね。[天世]そんなら
平生れ蔵浮きたのく。[乃至]芝居の某れ番門
何ぢ亀ゆ毛濃、とよぶ。ちゃ人が派世でもない
ぶり変ると寒ふへしまして、二すす芝居ふ
も、変色ふ、振ふ、と我ら号じてう分ると
ちっと、まり蔵くゝ横丁の割近ふ屋で、我
ちらぢ新とーうめ、ぶとりぐき、弟ぶ屋の役者
ぶ白眼べゆらを首と振まべ同ドゆうに青と振
て、一ふふ丸ふ振と似せ、ゆ、よ一会ふまく、濃の
人ぶ寄ま遠ぶと無ゆ年ふ
い、毎日ふ色して声色ふるふ難いとゆ表ゆ座
の方ふ押合てこふふ同高ふ通の中に夫ふ後表
ゆ濃新ふぶら、ふ流ふうゆ一ふふ耳ふ、ぶ

の[ふり仮名]ゆ[ふり仮名]ふ口ふねぶ厨ぶ食て仕ゆ、ふ、ふ
いくふねゆ。ゆふふ後減ーもめるりのぢや。[声色連]
ゆふぶこいつぶ声ふ、ふ、ふ、ゆも、ふ、ふ後でたふとを
つきやぶふふ。ふねふふぶふふ面目ふ安ふ
ぶ坂ふ澤をきのて高業ふ、ふ、ふ横
ぞっぷやうゆ、だりゆふふれめぶ。[天世]そいつーぞう出せ
く。[声色連]めれも表ふ二連とゆぞふふ、ふ格別
ゆふふ、ふ、ふ、ふ、ふ行ぶ入ふと、ゆ、ふ、ふ、ふ
ゆ、ふ、ふ、ふ、ふ

評まるとるハ老体の声々好んでもない人の
義を評。叔父あゝ色つゝ人の癖も上方でハ解氏
かまへて「上まるとるゞ江岡我童で今り来ると
いふてはゝしまうあと「ハそゝとらでせい」トいふぶ
お宝りれ口癖又江戸表ハ扇とかまへて「序ふ出
まるとるゞ岩井半四郎でどざい」トいふ通で今り
体たゞ只今ハ扇とゝくで軽をあゝ」て素面
の出ぢゝ「序ふ出まるとるゝふハ古風とあり。
だまゝてはゝし出ともあり。杜を一つと以て
あり。一す大和屋とばゝふ出唄とキッカケふ
つゝふとゝとゝりまして

【きてきやん】たゝて来まの
て」迎ふまと浮く付「ヨ助ゝ面」ゝとゝねゝ。
悪くても叢ねゝとはゝふ者ゞてれ出と。俳
いゝい茶又色と交て居るも之切極めよ。茶
ふふ戸惑をもとるハる

【ふるえ】叔父振好ゝと茶

茶の役不足とゝふそハ尚されるゝやしこゝん主
俄の商売出て歳とゝり。ふのぢゝて其後茶
引振仕方れ芝自慢

【ふるロ】芋菓と二ふ疱結
ふて。後絶とゝん世行燈へ風呂敷とかぶせて変
ゝて」内ハ働きぢやゞ」ゝ牛の中に油煮ゞえと
ゝとちゝふいで。有名も茶屋も油だゝけ也と
言のごく。

【こせつき男】されべく。百日かゞゝの代ふ
ふぶくちと繁く付油で付てめゝ会へかぶゝとえ
赤えれど。ゝを切てギッリとふゝふ。ゝとゝん。ふ先
牛の火ゞ付てうゝえと扱かゝと。チリくと
めさま中へ火ゞ移ゝとゆゝ。ちゝふ人ゝ慌ても急
ふハ歳ゞ。ちゝも大きゞ焼痕てめゝと

【ふるえ】主
ハ即席の出ユまゆゝ。ゝさべ一夜漬の杜ゝ。ふ
びゝゝら仕直ひ時ハ本舞ゞ今り来。叔父あゝゝ
好よハ「まゞゝんとゝふあハゝませねゞ」トふ人

めしての在付口上 [むぎ] 引風をて声といさめ
ちりはをそれべ宮あておやめぐ しい後ふごぎり
きりうぎ。甚殷な歳をふも。山賊食ひとりを
の [侍より] アあほいそれい義をま出清りれ
口上ぢや [むぎ] まづまゐ等しれ拾さ [陸五] 何人
高くめしてもめふむ石九どりのあメ西ゑ
文句でお里が表れまをるまづ八什ところ矛振
赤文字の泡出 [天ぜん] 待ゑ〜こ〜ろ〜く。

▲ 刃ぶり好

[おねぎ三] ソレ刃振といふりの八役者のこせとあく
春ともむぐ山ぐ。ゆまるこ〜も寝ぐ〜。ふいろ八
ゆョ一す茶表ととれぐどもその公ぼぐ牛辞い
表をこそりのをいべよ。牛辞と氣ちぐ八ふ
ぐ言ちぐ八とほんぐ八つふ後八よ。ア有てこれな
つとろさらかぐまぐほんぐ八耳武員ゆとるら

刃ぶり好

ほんが 猪敷よ
こ物と
よ物と
牛奇と
こ〜〜と
出〜と

引〜ゆ
ほんが
猪敷
と
ゆ〜
出〜く
ゆ〜〜
〜〜〜
智ゆ
イヨ 柳〜〜

徳亭三孝

はんぢをつくることらが稽古ぢ世界の頃ハ世き
たけや。裾のひくろうぬぬ女うに公みて出入をれば産
婦と見えるそれも又片目つぶれさくわの老婆ぐ
ゑ久稼くと目をつぶらふ。一すぢ対抗と仕ぶ
女うるら。こかうとすると坂表ぶでる。ヨシカ。そこでや
ろうぬると助言や。かうとすると。こけおろせも
ろうらの平。ホとろういふ対が加賀屋。ワット。元
ゑ出てまく。から出てくる。ト坂。二浦サ。フレ足稼く
おぶ稼ぶすりぬかぶみぶ。ゑそろうとぶうき
い稼くサクくけいとせう。わとのぶんまぶ。おろ
はけ稼くと茶ぢんの間ゆわわくぜ。ヨワット
まちまく。フレおれが。トいふ対で古法振てもぶ
らう。ふふ。ふまろぶ。ヨシカ。ぶとぶおぶこぶりぶ。ト
つるぶ。のこうんぶろ。ヨデかゆぶ。ぶうとぶる。ト
のうつきうにぶる。アレサちめくぶこぶうするぶら

まぶつるい。ツリヤ。ぶんくくト三ッさぶつてぶるい
トぶるぶこぶでぶウーとわふむ。アサくぶうぢぶア
ゑんぶつるいぶ。チョッのこあこのるい。

▲ 蕎麦好 ▲かけ合

大ねぎ三日 ●一ひふべらこ七と表情で。かぶやト浅村
面と知ーこぶ。ぶ七ぶかぶやうねひとり社氣で
ゑまりだぶけだぜ 注三日 表情こかけ合のこたいあをりた きせこぶ
尾濃蕎もようぶど中だの▲ふせぶろうのみこん
でもだで江戸河ぶらいう稼へ衆弱ぶこの暴面
いめつやうだ河ぶらいて「乱世の山ぢぶらく
をりで念仏ぢぜ入てまアうて居ぶトいふとぶろハ
ぶうぶぶ。モシ一ぐりと稼くぜ。コウねしやアアノ伝
ときいぶうぶいつぶ田三助と▲うんあや。きいて
ゑんぶうト。絲有けまぶぶぜ暴れもなら稼く
▲田三助ハ沢渡ぶうんぷと社くぢぶハ。ぶれい

中二階（女形）のけんとを拵たらば、仙女ホ今の遊考。
ぐるや富国三助万低、第一たくふ社会ぐら。
いこテ立役を中ごたくさんかるらるりぐ
●今年の二十六枚ゐやァごうせいとおメと
ぎんつぐぜ。くくっきり咽ごいくくってらくてこん
られるんぐ。エ人を馬鹿ふさそのふたぐア。
豆腐で仏百人法ゐ人さろ豆腐人そのぬ
▲人見いれおさると社会まうけごコウさいて
ぐぐアまぐ中だらうが。
「ホウやきゝき女のこゝろさし其方が
患義ゐんじて家紋相續いさせ
こわう必ごあんじごうちやくちや
くちやく。せの稼人。
●くちぐの内ハ社モウちのとぐ。まぐ美ちやア
生ホ仏遠ふスト仏道ゐ、先生ぐ言服

○声色は古風社体
「ゼニひさしくつひまぬんくつ
ちごろのめんくとさらぐ
あまりせぬおまもぐらあふむ石で
つくふもわんまう志ろぷいうう
ふるうい西のうう小屋とひうう
エヘン
「ようひふふうる
あまあうう
ちうもその後ハちんのさ
業慢の気く
次とうぐ
ぞうあうぐーの
猫のひ口
ケう
めうと
出さのハ
こていう
お肉弐
よりや
ぞうやア
さうーやる
めく
イヨ
「スうの幸四ようが
ぞう舞ぶうの中で
うう流りふあれちや
くるせうう入ちさま
○聲色の聽衆
「ふうちが
きぐつよいうる
「ふけくきあさの
おうさ入ゆう
トツテツ
チニツツトー
「いう
あもうの肉が物ぐ
もぐいく
ぐうとうちうぜ
て物ぐうう
あのうさんで
いく肉がきうの
いう
イヨ
あうぐそうも入弦
大和ぶふ大和ぶ
もぐいく
声とはうむ
たうーやる
物ぐうの
イヨ
やまうとぐり

上上　五番勝　のんき者　癡呆

上上　行　色者　縦長

乃元　のんきものよりは生来のきの長漢自慢さ。
勿論でんぐりとのんきものの名ちがへでんぐりよ
慧俳の平でやまをう。根の平行さまの義俳。
まぐ名高き名の拾屋とまるさぐのちろ人
とび迄でいでんぐ名井名ぐる。平それより割こと
桟敷れん抱ひとり。粗言ひとりとぐとさぐ。
れと色。間接とちぐて四一平ふるつまをう三の
の土ふ相撲しかけ。ふれ人も者とらいまね
ふまぐよりとめのきろとれぐ諸ふ井ゆく
三間接とちぐて我ひとり働ぶりとちる平人芝居
のんぐ名て大ふ花。その母うにされて性らる塩。
大ふく妻くん浪出ふヤまをる。

粗言を
のくめ
顔イ
吐くと
かり
おくりア
芝
居ハ
羽
左
衛門
りきぎ
徳亭三孝

坐長屋乃仏と
トンちゃん

出ぬきの日 横丁のあぶなかるまる人 ＼アイモシラズトシハ
まるごちゃ組もちゃ組 ＼ 藤ふじ組 ＼ けふはよく這入
九ツ半たつ 土方ゞ拾ひ物のだ 今日繁昌としておなる
せく繁昌 ＼ 這入 ＼ いれかへ ＼ 今拾ひ物も六人
さてでるといつけ ＼ これ ＼ 九人の十人のと 金
らんちやなまく組 ＼ 三ツ ＼ 数を待るかりだ ＼ ＼
がぐんと遠慮の氣のわるさ 浴上がちつぺさ
わるのでいつ合ゞ ＼ 後者もちやくまつけ ＼ 実
と入ゆとわさ ラフトく ＼ 他に撞 ＼ 後物ちら
もめくの拾ゞきせる 自ら ＼ 孫の上 茶飲ゞく ＼ ＼
組 後者のこと ＼ 実ふ ＼ ＼ 試幕の面白い今
明 ＼ 三番目場ゞ拾ゞ ＼ 実ふ ＼ ＼ 歌の後勢
いつゞく ＼ ＼ ＼ ＼ 紙 ＼ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼
ヨヤ ＼ ＼ せゞ ＼ ＼ ＼ ＼ ＼

ヲヲトにゝら生るゼッリヤ足のうらく、チトお尻を
ロ紙ゝふさいハートさいたはる、モシ鍵屋が解やさ
あれが結んで見ようか、チトイ行ちう茶屋とかもど
の、下駄よ脱くこゝの紙でふきの先はいそぐ
さうさいくゝ、ゼッリヤ熱湯でございナント氣
が利くだらうが別合のちかでおまひるもそ
ハ、チ人一ち徒利ゑ男ざ

三段目長唄

大上上吉　　廣直

中ちうこうの横丁の格子の家　立板の雪踏ゆ入
ムラ〳〵ゝ　利家男　ほんに横丁の横丁の横丁とおくわこ
るふらうくの横丁で出さうなもの
ちや　ちうこう男　いやくさうでない横丁ばかりゝ
人の行ふさるぐ横丁ゆかハふねこと
ゆ別くゝ横丁きにハ及ぶまい難横丁

ろぎろくて出てこハ行ゆ仕打がのゆゆ
傾ぶ出き人　これどもこれでまけどもまことそど
うどけども其中ちうひとゝふと正潤つんゝ横丁
のこ物ハ偶然とて法遠ゆ立板
ゆ雪踏でゆらうぞ　ムラ　後のごとく後者場幕
より出て気遣くかくもゆ人ハ新合もいれど本
雑毒でさるゆハ物ちやちうけゝうゝ
折ゝ高潤子ゆ役者ハ戒ハ一潤子ちう上さ
附ざうちくゝと耳くゝとれどゝくゝの行ゝ
ハ一両ちもしれで別て低い潤子ゆ後者又ハ
ちりハれて声紙の物ゝ紙くゝ行ゝと
るゆそこゝもゝこゝも同ゝ心ちうまゝ
こゝゝとゝくハ後のこゝ善ゆるとゝくゝ幸抱役
さゝゝ　ホ　天せい　よゝゝと氣の移れさゝ物ちや大
俳ち実ゝれゝ気ハ拝音ゝらふびゆうれゝ行猛

そこで天神様手をもてごく穿鑿ふ
それから人の噂で一日見物して居るとそれ
ちの芝居桜 [illegible] それから名古屋の芝居
居ほしさに芝居へ入り申さの
時く いろもたぢや、まう沢山
きてたいく

去わきこ日 ●かけ合

▲アたいこ、ゴ、コ、
代長帯ふまりさら
蔵屋へ入てきて
とーてすまうこ合
おめく、ぶ、食用ふ
もらア。角て矢太郎
で二合ときめよう。
矢太郎とハ仕り者とのふ奏奏
在申そ伺のひ人公任見めびて世見ふ色

居る所ハ仕ふ申矢太郎
ふ伺ふ居ゆ者ふ
ぶ。●伺ふ。ふ。れて。そ。ら。ア
つのぞ。ア。ア。ア

狂言ぎつね▲ムウ、さうぢやア又、やんとうかとやつさ。
さうぢやそもそもそこもとは、なにものだの、アレこゝいふてこねさえ
ねぐむせうんふさるぜおわるさこんまく、ゆめ
だらう、をてのそぶかるの●あの男は、ものうれいぶ
ぶうりをしてゐるの●あの男は、ものうれいぶ
さえこねぶごらう▲ナニさえこねぶ、ハテつゝ、見ぶの
ぶらうさえこえるのおそれのそこえこねとこ
●うんあるよ、ものよ、ハ一世とうのうつ食ぶ世あ
世とへぶそこぶまえぶらそぶにあてゐ、見おそこれ
ねとうふけさ▲ハテ、その利屋ろ牧子が一世でき
さうだ、とアゆうれいへおせぶらう、
●ハヽ▲アレくゆうれいぶ、くきえぶ、アレく
わちくうさ、アモウちつと待ちさ、首と猫の尾ぶ
ちつとぶろう、ハテきえさ、ヲヤく消えさあるく成
たぶ、コウ、今のハ何ものぶらうあらアどうも解せねく、今れ

男　愛ぢやアねうらうらく、うさ間あうれいぶ出そ。
ふうくあるさぶ、あさぜらうをとんぶう、かやの
内へおうイと這入うおれいぶでゐ狂言師ろ。
女妻　はうひの幽霊ふうさのぶ、ヤく、おみう
ひるあ紙さうよそわるぶあまこんぶらう
ものの浮繪さ▲ハテ、なあ猫のこえうこん
ぶう生さ▲あるこの猫あぶあのかあんぶく
あて有ぶらう●さうまいもれ繪さのぶやねく
う▲ナニえんぶうをあれ、あるさ家ぶらう●アリやく
ものうあうさく、ものをあつてあうろうれくぶ。
ドロくくこのこ者と、ガタリくと昼猫ぶだろうきを
えう。あくあうぶやあアとあゝんぶぜえ知ろう
きこえさのふあと二ッぶ、あの男ぶ、ものびさたを
うえそあゝんぶろう、家ものぶ白紙金分ふあ
遠れくこのイョ役者アリ

やうび

功上上吉

年代記

吉實者

紀憶

[欄外] 紀元太之廣のすぐまり。寛永元年より寿齢百八十年来のこぶ。四紀をさぐり。秘蔵霊てあまねく開紀れいむのの内に華胤まもり人べき老人世の盛りを寿命の仮者て傍むをの仮者をあるぞ。名人士五ろう多一代出仮者使うちは寿紀の高松。万年とれ一つ寿ぬ上るて。吉実者丈の一巻 [欄外] 競男

そのかりの一寸一夏て聽うとまれば陰くみ枝葉の陰で長生。[欄外] 近松門左衛門

浄瑠璃奉は名文ぞとはねきみ見てれば夕方の悪魔の仕業ぞ中ぬ。浮世草子作者七変化斗文。場数千二百紀。国学者紀国屋文左衛門。五代目人

三事五業

古今実者

代名詞の人今年実中村重助浄山令八生橋田治助光の源り如皐字の数を分名うる俳者角の役者八せの名まで。[欄外] 左文字

代字と冠らて上ぶ年代記のやうびと行はこそ。

去ぬる日、戸人まで後者の家育、まれに法名うゞ
へ元禄十年、追善にて、二代目伯龍が父の恩と
いふ義にて集め二冊物を板行して、是貧連絡
中間化とえふぶど絶たとゝめる。その本社中ゐ
こゝく故人の法名家育寺とまてめるがごれ
ゝえ孫十七年ゝら享保十四年までの百、亡人
七十餘人の年月日時どゝくきゞど記した物さ先
達宝保九年辰年ゝら、安永年中までの古くと
めつるそ父の恩に残りと綴ぐりの八古今後者
名を集こゝふのゝぶゝりまとこれ、江戸評判
さ三千ゝら作りさゝのさゝゝも王子略考、是者
小冊ゝ略考家に藝の板えと出ほこ編又
甘ゝ所と追て出泥さうとゝゝら、方ゞく墓所と
ゝゝ人ゞんゝく探ますもゞ、イヤハヤ是も相好ゝゝ
ゝゝゝ人ゞ略考ゞどゝゝんの続に春仏ゝゝとい。

ゝ水滸ゝ清ふゝのゞゝ不のゞえ紙の工まさこ
仕打のゝる間にも、袖ちぎゝて今を包む拓ゝ
いふこゝふ古実のゝるゝさゝゞゝいふゞゝゝく
と云る今ゝかゝ集めゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
どうゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
袖ゝちぎゝて今ゝと自ゝゞゝゝゝ其音ゝふ
衣裝ゝ接ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝの協ふさにかゝゝの工まナント格ゝゝ頓智
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の続ゝ接ゝ狂言ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
江戸中へ出ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハゝゝふゞゝの板ゞ枝ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の人ゝゝふゞゝ盛ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
遠ゝゝれゝ略考ゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
狂言別江戸の舌ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゆゑで、弊五年竹本はの浄瑠璃に作ることゆる。
ナシト きついりんぐ子。スヤヨ。附のれ云方。寸一ゆハ
脇考の大ゆ柄。それをば志ふびゆ。ひふぐ子。此る
の続ぐ子小紋を打ッ婚りとゆふハ世俗の傷りと。
袖しきちぎりて二百あと文句ゆもゆあ云全く
元祖脇考の名奏とらふのごとら。扨又市川
流の志ぐ〳〵ふとゆハ元祖戈牛が始ること
ぐ。甚ところハ野良あらゆふ鎌拵此又ハ赤つら。
或ハ烏帽子大紋ゆを縛又ハ紗夏烏帽子ゆ林
竜ゆとで。志ぐ〳〵。さどうり一ゆ又ゆて。板幕を
出こ拵さとゆる子。今の舞ゆに二度の間言角鬘
力鬘。榊の赤袍ゆ大を力。市川流の幅帳ゆふ
志どりで住始こハ。二代目名人柏莚さ。志ゆも
附の狂言ハ万歳大福帳。安信宮ゆ住の役ゆ名人
山中平九郎で。蔵倉指五郎景政ゆ柏莚で狂

のキッカケハ平九郎ゆ大福帳へまちかけゆ赤で切幕
から〳〵志ぐ〳〵と一ゆ又ゆて。柏莚ゆ出ゑでき。
トコロガ。平九郎ハ軟国寸郎と引張て行こ
志ゆ。柏莚ゆ。ゆと安く出ゆて。青二才ゆと。
志ゆ〳〵弁舌でもはきこ。ゆくゆの言葉を
だら。大福帳ゆ長かゆる者の住組ゆふ。ゆ
ゆどゆ〳〵で〳〵ドリヤ〳〵おゆまうゆと。ゆて斗り
で。板幕ゆ方ゆとゆ。
間寸郎。ゆきとして〳〵志ぐ〳〵と一ゆ又ゆて斗りで。
早ゆ板幕〳〵と出ゆさ。そこで義太夫の男ハ板ゆ
又ゆ柄〳〵ゆ上て角力坂のゆうに。よゆく。
流石の平九郎ゆも住ゆ〳〵ハ〳〵せうゆ
ゆい〳〵ゆうゆうドリヤ〳〵ゆ附又。志ぐ〳〵と一ゆ
ゆどりで出ゆど。又弁舌の間ゆねゆる。生ゆ〳〵ハ
人情ゆ掛ゆて〳〵志ぐ〳〵とゆゆゆてゆまでハ箱いと

ちて国十郎が不届ねくナト暮るの脈行史
紙でいろいろ言ひつくつあるそ稀ちだ。
本義義でい平九ぶが後ちまぎれぐとて。
「ちうさんとそる丞ぐ赤ぐ〜くことあくとくこと
伯奴ご母い。国十郎が「赤ぐ〜くトいふ平九ダイヤサ
赤ぐ〜くことの母い。トー大きなあ巳て。せりあるあ
ことと云て早く二少ぐ国十郎が「赤ぐらぐ〜く。
赤ぐらぐふ〜ト。今長唄陳ぐ〜ぐるどのそるで。
幅長幕ぐらぐシくくことあけ出て。紀乃さまちうさ
本弁義の方ぐ〜ぐ〜ト白眼ぐそのあ母ひこいふ
りのぐ〜ぐ〜ぐやいあ母いられど。あ方ぐ赤きこの
まぐ〜ぐ勇ぐ〜ぐらぐ赤ぐ鹿の怒りまち後後者ぐ云
とれ浜でそるのあ見当のぐ〜ぐこ八鎌浜と上
て二丁四方へ宝蔵ぐ〜ぐこ浜ぐ〜ぐこいふ〜ぐ。ぐ〜ぐ〜ぐ〜

平九郎も指図し、意地の強いこと強く、と
食へと言てきせるを出しかぶり、国平郎が
右へ吸付やうとすると左へ呑、左へ呑、
こそれば右へ呑、意地悪くするゆゑ左を引
抓んで吸付ことしかるべし。狂言
仕業へば、ちやうと楽屋へ入て平九郎をきあ付
やうとすると、平九郎がいろいろの様数の組
中が居て敵きせるで吸せるのを言さうせ
すべてあの時代の役者と新たなる
き合ものゆゑ。其時代の目を忘れぬ
辨わくそれなりとそ。ヒントをきはい意地づく
でハ女房小国とまハさせこ平九郎。又相撲八
役者の氏神とよばれ代々勢五郎といふ。
もの〳〵上まれ名誉とふ。
おろかなる中にも元組頭子八相撲
の上手とよばれ。其は「ことホ氏」の名ある
まへでうつ。こと仕道ハ
ぶ小屋で浅ふ「沢村宗十郎」の地出よ取て
居ことのと流の好俳諧ゲ上まで至て社会
本流伊勢れ芸居「浅ふ」
しゃ。ホイ是でハ浮世絵の
さらぶ是ら名ふ。
二回年大坂「敬三郎」
改名ビ。
「姉川」
ひ見ビ。

つるべきくとゝせ」が同じ元禄の頃の「坂東太郎」
縁あて江戸「藤田弥次郎」「沢村惣子郎」と
めりつて住ひ有りしかども上の一字にそれの惣子せ
どきの惣子とて師匠役をつとめ「童子」「筒の
狂言」を惣子代に仕ふ情「書我」「水戸城」「小瀬
村」「山家」「大磯」「市村」「菊」「沢村」「宗」役にて忠勇「今川」の狂
言ふ彩兼の役大でけて「沢越」「池子」「宮
ふめづり」「ぎ」「ぎ」て「沢越」「池子」「宮
とて」「るもの」「上上」「白吉」「ねぶり」「上
ふ六七人めり」ふ「島」「仕上」「上上吉」「極上吉」
海老蔵にはぶてい八代目の浮世絵ふ「坂東太郎
ふて」「ぶ」「く」の大めり「沢村宗十郎」と字ふと改め
大岩文四郎」「役」「久米」を弁ふ「その」「大めり」
サア宴ふ又古宴でふ「ぎ」「ぶ」「延享」「延享」「来」「役」

中村久米を所座弁ふ「大矢数中村」「舞」
ふて「沢村宗十郎」改て中村宗十郎「大岩宗四郎」の役
ふて六月朔日より初日出「大ゝめ」「ゝ」なり「今」
忠臣蔵七ツ目八山村の酒子ふ「形」「を」「ふ」「役」「を」
「ま」「ま」「ま」

大南りにて極上上吉は位と無類と書き出府
江戸にて海老義の名ろ極上上吉の字を
翌三年長十郎と改名して江戸中村座へ
「海老義」と十六年ぶりに生合古今に大南りの
ごとく海老義は江戸の名役者なれ
とも記されど両人合はして大極上上吉小書ふ
根生「海老義」無類長十郎と記二の替り七十郎
又くわうにて付無類となる海老義は
大極上上吉の内海老義は不高
なれど江戸中が呑込で上に立て合点せぬ始末
大立物なる巻頭なれど二枚目は七十郎を無類
と世に中江戸中に氣ふいふ甚だ生年の因産の
新人世海老義大めうりなる長十郎の無類を
ろて海老義おつけ無類の位あくまで有類と
いふのなりにて長十郎とが至極上上吉と記

たりされとあくまで無類の位ふ用ゆられ
元義ふのりなるふ定暦元年末の板目をみ
海老義は「三類」として斬ふ「海老義」と「大至極上
吉」と「長十郎」と「真極上上吉」と記せりあくまで
特義ふて是なられた位付くの位付の間へ名人
上手と云入れともあり手後長一郎助墨
高助と改名して向むつく古人とならりなるく
「海老義」と「無類」と載さる元浮別記ふ「の上
に越し後付ハ不直ふ無ハ新ハ相応ふ
ふ極ろ未ハ及ばでなくも浮別に「無類」
都と記をか「大至極上上吉市川海老義」「真極
上上吉助三郎三助」とあるとなて名人上手の記
ともなるなり近年役者の位付高ごとうといへども
付二人の義ふ相応の位しまるれとなて「有道」を
役者の氏神とまれ納ふハ聖文の開山と名を

強せう先ものみどく初下り森田なる【三筒】
の源三郎とせくれ附へ相撲ホ藝秘の中へのげ
ちまれ私との安役者ものしがづくの間ホーちろ
の五者こうり位付決めらるそひへ酒子一人よ
混れり敵ある付来也とふふ謡曲師酒子景頁
ホて間ろるへ半きまる義云へ相撲まう面白とふ
人気ひるる相撲へ半きまるまう上にて半寄
けるべ酒子景ぞきれ武士町人百姓坊ろ武人
美者傾城歌舞伎娘のこうぞの事ホまるる今ふ
ところとへ見えれども私ど義へホ供へへ通ず
さぞ相撲へホ苦ままで毎ぞ見の忠相撲
へ半人ホ景ん金利ろるホ先ホ立ん【大関】として義云
近下りやもりのと者ホ由足利【大関】と
【真極】と住付のろる正ぞ【忠臣】蔵へ
お義仕景ホ獨義湯とふぞめを間ホず

ふぞう【杵義】士の性云へ元禄十五巳年二月
十二日初日ホて敵討【中村】吉ホおいて【曽我】夜ぞの
【仇】討ホ千郎ホ中村少長五郎に【大磯】傾吉勢
巴ろ坂ホりて言ひて相止む見刈義士の近両
の字ホ姫として大坂ホへ宮永三氏年五月五日初日
ホて【摂】ホ三居【千】【年】【花】【屋】【様】ホ【寄】【浮】【世】【草】【子】【作】【式】【近】【ぞ】
とふる切ホ【其】【敵】【大】【記】【作】【之】【助】【作】【式】【近】【ぞ】
ふ書しうろ【ぬ】【ん】【浮】【ぞ】りホへ高【浮】【世】【浮】【物】【刈】【義】又
大早雷良三助と出初ろ【ぞ】【義】【伎】へ【宮】【永】【七】【寅】【ぞ】
【御】【隊】【左】【役】【屋】ホて【大】【義】【数】【四】【十】【七】【本】【人】【作】【者】【東】【三】【八】【作】【大】【ぞ】
【宮】【雷】【同】【力】ホと【名】【出】【大】【義】【同】【秋】【赤】【沢】【お】【義】【屋】【ぞ】
も【式】【近】【三】【出】【ぞ】【ぬ】【ん】【ぞ】【ぬ】【ん】【ぞ】【ぬ】【ん

元辰年八月十四日「竹年代記」にまして「偽忠臣蔵」竹田出雲作と外題を出し、大評判の評判つよくりがそ演
難波新作と外題を出し、大評判の評判つよくりがそ演
を出すけれども会場まして「百合姫」友達「ごご退散」
「出会行者入入習り」「大和様」初めの内は「上流」
後は後まと成むこの内を上流後を
流義はまの内ふ成村屋成じ舞台
出村舞台義はゆつる出を
成人ぶりこと舞台まこれまり「代表」
「代表」の自分は部付せ行あもの
勢人ぶりまくなりてどこの
「芸能通」「満」お踏り国さ
の出ぶれ行くして。出家屋国の名人ぶれ
「代表」大坂国民三助お行の
居ぶ。夫より続て義手とる新作義士
録のけども「忠臣講釈」の他はさたのもあ
えぶりさるふ後て「忠臣蔵」「獨参湯」
ぶり。「ヤ」「ヤ」「ヤ」ぶ乾はさ。サテ古寒といふ物も

もまぶこれ好るもの方あ出されるぶ場ひ
うもの人の退屈の口で続まで舞ふ後人のふれ
ぶ死なと。こんな出ぶれ後人演ぶ今の内
聴てもいいさい。どうあらもれぶ方ぶ出
さうだ。「「「」」。ふんまこぶ。

上上吉

昔日顕貝

孝功

昔日ふ貝大ぶ若いひよりれ切者つりて
ひとの役者の一流をこ人稽ぶ
まれけれ大ぶ「ふるは」役者れ出の出るたびお昔
の維新と役者の名ふ冠称たくはおやま
おいふこれ家も流て蛾ふるいぶ「男」
よけれど歯肘日れ出のだりたく役者ふ
ふも世ぶ「ふのくふのふ」ぶらぶ
肘ふらこれふ小さくふふこぶひろ一ぶり

自慢をするべこれはもだよ 乃丸 俗に云ふでこり来
たりれども狂言ふむひしと今との見物あり昔の
役者へむひしの人物れ義ふ入る義言風今れ役
者へ今れ見物の言に入る義風皆それくの
恐めりて日震うらにてうふ百でいるけれども時キヨ
くでいり手る其内ふの高附の役者へいよく
器用ちぐふて義道ふやぶへ今りませぬされと
昔見物ふむひし見物にも新のるいことぶ
いりまする武のくそへ役屋ふ浦ふておきり
ヤませう まづけ西で者見物負ふうそはじりの
くふばは おも義にまるとぐあるとも ハテ先れ
たれとお考へでいれべけて生ちさるぐ高世ろ
と高まする 乃丸 それでもむ考こふむひし見物を
考らべだまうちやうぬれ祝くで幸四郎れ名を
小四郎とぬうといせふ 乃丸 まバひろ 松本出所

といふ名人がのつさいの長い手差の長藤が小屋
ヤ一こ、奥樂寺町と助廣法とやさうてあうるよ
いきこ そんなくはせうしてきいてあるべの天竺ま
河出でくぜまく
去ぬきこ日 おきゥ お若流なるお掛けごの社ぬ
ナンダ八さん面白く極く祝仁が又うせさとふ新
たて、へ、さうまた極くのの さこちと老人もつ
合て見るさ又つくく日極くよ足でもちめ空歴
年中ぬ色男ご今ぬ若者の四ウ下巨燈兵法
ぢやア極くちらが若の府ふにへちんのるだ安
又て臣通くさるがれく八百八丁に色塚て建ね
ぢうだ世暮と化物ぬ帰粕ぢおお根ふ先へ捨
たのいおいくが住さるのよ粹ごの粹方だのとふ
るど大通といふ路でのりぢ山の寒鳥待兼山の
郭公といふ通きのおふくがてあらきさるる面白

程あるまい山ぢのいろのごのゆう ちよび酒屋ぬ
極りあるでさうぐる紅成仰ぐ山と名ぬ対ぢ
其ぬの通言ぬい河内ぬ。このつい日本ぢ大ろ
極りあるで清大きくさるんぢ。昔ハ一すしさ
河さんも大きのいきナソレ。紙ことをうるさこのい
日本ぢさとあるソレ大の極りナント大きうりうグ。
丈ぢうく昔ハ万事物ぢ大きの事河内ぬ。ア
乳の大きのあつれ。ア級者ぬ鏡の大きイヤ
又男の大きうこの奥樂十町さあの助五郎ぬ
中の廣治よくいふ長ぢ。私がの奥樂ハ大
奥樂ぢ。十丁ハ駿河の屋十丁このあいだ
の寿て居るのハ二代目九屋十丁ぢ。備き変人
紙河ぬ生れぢ。ア人でも助廣治ぢ河津候野と
云ちあア。ハつでもぢのこるぢ極くイヤ大きるのき
墨丸で源氏山釋迦嶽ぢんとしてそんあるぢ

われ、鼎盛一ッ、ハの斎さ。イヤ聽おせんぬ。ものがある。
其洞金れ狂ふ云へあるる者ぞ。河ま猴野の間か
ぶ真剣勝負ぶ取りさんざらけへ猴狂が河ば
がの心負ること、衣翌ハ河津が猴狂を負ハレ
二日も三日も負のとびとがあると長負連ぶ向
海老心大論ざらはイヤ十町が本業で修行
とさんぶ。奥樂ぶあ洞でるると押切さんざら。
ツイ切落へ長ぶかハらのイヤるへハ十町が右と
ぶさうら奥樂ぶ長るの文ぶ出されるとぶ毎日
奥樂十丁ハ角力ぶ長ぶ月ぶ番ると番洞賣
ぶ奥樂十丁ハ走まるへ猪負洞と賣で出ぶほし
さハテサ。ハのるとぶ年老てゆれるぶ虚なのハ
うぶ丈ぶうまぶ賣ぶるとぶあるて。これハ減多る
人ぶ嘆ぶとぶ。ぶ伝ぶ老ぶ云れるうう今まぶハ嘆き
われ虚ぶも寝らしのハ絵き実ぶも虚ぶと

ハ洞ぶと云れと。聖人のハ云あて出るとのぶ。
エヘン。ちと云ぶ出ぶ長ハるの。イヤサ知ハぶ。ぶら
ぶ云ぶ上ぶ出りの峯ぶ小秋の中山へまるとぶ。
ぶ出るの滝と云ぶるるく。イヤ嘆ぶ出ぶある。出るの
滝を捧くと。侯ぶ姫ぶ云ぶ。土面の疲
い女ぶ。ぶ性ぶ捧くうら。今ハ土の中へ埋てない
さうだ。ぶらぶ出い附ぶまでハ有さみ。ハコデ。ぶら
ぶ疲ぶ出ぶ出るの滝と云ぶ。ぶ別浪ぶ下ど
七ッ。いりぶ。世の中に不思議といふとハるハぶ足
だうハ。ぶ其ぶ出るれ滝と云ぶ。ぶ誰ぶ捧
ねぶ自然と云ぶ。ぶ者ぶ。ぶ。ぶこれハぶだ
と行を洗ふて云る内ぶ。ぶ。ぶ。

たゞ流でやすみぞを府へ沼尻の芝居で王子路考が
梅が枝の清塩、志ゝ乃目下ど七ッぢり、附も遠へ
ど小枝の中山へ通ひとこ行くの一公ゝる往昔の
役者八月の清ときりのさこまつり小枝の中山へ
そるゝ其道へ源ゝれど一念八上ゝの路考、誰ゝ
劣ゝる芝居もゝいゝら、狂言とゝひこゝらも、中山
まで面いゝこへ。ナント格別ゝらうゝ、まゝこゝで
八今ゝ役者の一念八我内の浪根妻へも害
ゝもちやゝわゝ。ヤゝゝてゝひしゝ大きゝゝ芝ゝ、ゝるれ
清のゝワゝとゝふ書と、樂屋てゝゝゝたと上総
房州ゝでゝゝえて芝居の洞盧と
ゝ遠ゝとゝふゝゝ。ナント大きゝる芝ゝらう
ハテ子、それでへ定て王子路考ゝ姫ゝ
ゝらうゝ。ナニサ〳〵時別ゝゝ七ッぢりだゝらひゝ
ゝ入ゝてゝトゝゝゝ阪名自作の落咄

芝居の銅羅ゝ
世俗の通称

も江戸ゝゝれるきゝ之奚亭可樂、朝彦房
夢羅ゝ、その外高名ゝ新連中、ものゝ
上ゝ達のゝゝ極化して、拙作ゝ頭ゝ敬
只出ゝゝゝゝ甚ゝ急俗ゝゝゝ多ゝ
休ゝゝ。

▲東西〳〵足ゝう「宣惠之弱」でゝゝゝま
をゝゝゝとして○樂屋ゝゝふゝゝ。
「敬役之弱」。喧嘩ゝゝより○ゝゝゝ
まで「道外形之弱」○居ゝゝゝゝ
○ひゝゝまで「ゝゝ女形之弱」のゝ宿
ゝゝゝゝ○ゝゝゝゝゝ下ゝゝ
「花車形之弱」○岩爲ゝゝゝ○ゝゝ
ゝゝゝ「若ゝ形之弱」○ゝゝゝ
ゝゝゝ役のゝゝ。後ゝ「惣巻軸
○芝居ゝゝゝ大の俳劇等ゝ残扇ゝ看

はさし刈ち蒲素追つゝけて上要巡置ハ
こゝろの内本面ゐてはゆてなるハ且借本
玉と雪人物はなち方様なりうれ代貨本巡
扇中へ仮付られ、客者評判記の綴篇と
ほゝゑ綴はる絵の上巡評判よ帰〳〵ゝ
帝上巡昭上

江戸　式亮ノ三馬欽日

自跋

漢書ハ汝南の月旦評あり。源語ハ雨夜ハ品定の事。中上〳〵平〳〵唐山の時代狂言ハ上上〳〵和げ〳〵吾日本の世話狂言。所謂俳優評判記乃鼻祖ハ〳〵。笠菊卓吾雨雪ハ洛梅。〳〵咬ヒ上ハ劇在行を。西鶴園水ハ聲〳〵て。自笑

其績ふ止まる。後年其笑
瑞笑〻ふ的。其意を續ぐ
評〻まるべし。今尚自笑の孫ふ
傳りて手〻の評判あり。さるど
伎藝ふ評の〻にて拗棚
通と呼き〻先哲いまど看的人
の評論あるをきうざと奉も
一個乃好劇的ふ撞着。一時
戯場ふ遊ぶふ自。意馬を
戯門ふ繋ぎ。心猿と戯房ふ

放ち。眼を東西ふ馳せ棧道ふ配り。
耳を両側の茶棚ふ傾けど。
尖棚戯棚合〻両面の照子
に作〻り。梨園乃打拵。看的の
分科。形容り影繇ふ従ふの
如く。眺めば眺て。泣けば泣く。生
あり且ふ生。淨あり浪子あり。
両脚打諢差且副。小生より
小且まで。皆て揚〻の演劇
あ作て。音奏曲ふ音なる而已

[illegible]高砂屋正高より聘むとぞ。
看的人一同小雜劇[illegible]奇
〳〵。戯子反く觀劇すれに
似たり。素より御色いえうどう
えんどう。古寔は見功者最負連
さらの子でんぼうけん太郎。
何でも三拾八文字屋。江島屋風
自笑が家名　其積が家名
ゆ屋敷とうり。よく〳〵アとし並べ
事見とさ小冊。目く客者
評判記〳〵因縁く[illegible]。

其ゝ後序さやう。

文化七年庚午ゝ九月。
酒ごう病若隱居。病後
保類し名とはあん金龍
山樂ゝ別業り。二箇月
余り居續ゝ間。

式亭三馬戯題

忠雅堂
大坂東區本町第四四平十
二番地書林
赤志忠七記

41-3